

星

粒の

奇跡を

信じて

悠川 白水

表紙イラスト||REI|



星粒の奇跡を信じて

悠<sup>は</sup>川<sup>る</sup>  
川<sup>か</sup>  
川<sup>わ</sup>

白<sup>は</sup>水<sup>く</sup>  
水<sup>す</sup>  
水<sup>い</sup>

## 目次

モトコトリミナ

星粒の奇跡

別れ、そして……

敢えて言うならあとがきっぽい

表紙イラスト・REI

モトコとリミナ

車は女性をひとり降ろすと、僅かな土煙を立てながら足早に走り去っていった。

徐々に小さくなっていく車を、小さな革のカバンを両手で持った女性は、うつろな表情で呆然ぼうぜんと眺めている。

3  
質素しっそで古ぼけたブラウスとスカートは色もくすみ、かつては艶つややかだったことを彷彿ほうふつとさせる黒髪も、東洋人離れした色白な肌も、手入れがまるで行き届いていない。

日系人強制収容所を出てから二年。家族に家財、自分にまつわるものの多くを、望まぬ形で失った二十代後半とおぼしき女性は、視線をゆるりと左側へと移す。

そこには田舎のささやかな町並みと、小さく寂れたガソリンス

タンドと雑貨屋が目に入った。

女性は、まるで夢遊病者のような不安定な足取りで、その小さな雑貨屋へと歩を進めた。

リミナは今日もカウンター越しに腰掛けて、ぼーっと外を眺めている。

4 磨き足りないその硝子がらす越しには、夕焼けに紅く焼かれた西部特

有の荒れた大地が映っている。いつもと変わらぬ、しかしリミナにとっては安堵感のある光景。

カラン……

「いらっしやいー……？」

雑貨屋の小さな扉が開かれると、年の頃ならリミナと変わらな  
いような、しかしボロ雑巾のようになった日系人の女性が入って

きた。

日本との戦争が終わってから二年半ほど経ち、どこぞかの収容所に入れられていたという日系人も、ちらほら都市部では目にするようになったと客から聞いているが、このような田舎町のガスステーション併設の雑貨屋に顔を出すのは珍しい……というより、リミナはこの店を開いて以来初めてだった。

5 「こ、こんにちは……あ、あの、何か食べるものは」

「え？ ああ、その辺に適当に並んでるからー。あと、コーヒーとかコーラとかホットドッグぐらいなら」

リミナは、ゆるりと店の一角にある手狭なカウンター席の方へと視線をやる。豊かな栗色の髪を、後ろにポニーテール風に結ゆつた美人なのだが、スラリと伸びてバランスの良いプロポーションも、しかし野暮ったいデザインのエプロンとロングスカートトのせ

いで半ば隠れ、少し色褪せて見える。

「あの、とても言いにくいのですが、持ち合わせが……」

「……ないんだ？」

お互い、ばつが悪そうに目を合わせた。

「こっちも商売だからねー……と言いたいところだけど、あんた、ふらふらさんじゃない。しばらく飲まず食わずのクチかなー？」

6

リミナとの僅かなやりとりの間、女性は気丈に立ってはいるが、足元が心許ない。いつ倒れられてもおかしくない状態だ。

「まあいいわ、そこのカウンターに座りなよー」

言いながらリミナは奥のキッチンに下がると、お皿を出して調理の音を立て始めた。

女性は少し遠慮しがちな表情をするが、しばらくしてふらふらとスツールに腰掛け、使い込まれて茶色が濃くなった革のカバン

を傍らに置く。もはや空腹で立つのも限界だった。

「はい、余り物だから遠慮せずどうぞー」

リミナは、ぞんざいに切ったオニオンをソーセージの上に乗せて、マスタードとケチャップを適当にかけた、できたてのホットドッグが載った皿をカウンターに置く。

「しかし、お代が……」

7 「余り物だから気にしなくていいわよ。お店で倒れられたら目も当てられないし、私が迷惑ー。日系人さんを診てもらおうよう頼める医者か、この町にいますか？」

リミナは、オイル色をした浅煎り豆コーヒあさいーを、白いカップになみなみと注いでカウンターへと差し出しながら、さらりと本音を突きつけた。

「申し訳ありません……では、ありがたく頂戴ちようだいいたします」

女性は丁寧に両手を合わせて軽く一礼すると、いただきます、と小さな声で言いホットドッグをぱくつき始める。空腹にさいなまれながらも、行儀作法は崩さないあたり、育ちの良さを感じさせた。

「持ち合わせないみたいだけど、これからどこへ行くのー？」

自分のコーヒーマグも淹いれてゆっくりと啜すすりながら、リミナはホットドッグをもりもり食べている女性に訊いた。まばらに来る客はむさ苦しい男共ばかりで、同じような年頃の女性と話すのはとても久しぶりだった。

「んぐっ……船で日本へと渡ろうと思っています。確か、この先のサンフランシスコからは以前は船が……」

「なるほどー。でも、今もサンフランシスコから日本への船が出てるのかしらね……っと、そうだそうだ」

コーヒーカップを置いたりリミナは、店のレジ付近まで行き、小さなパンフレットを手にして戻ってくる。

「この前、船会社のパンフレットの新しいのが来たんだった。ひよっとしたら載ってるかなー……？」

リミナはぱらりとパンフレットをめくり、時刻表を目で追う。

「おお、何かこの地名……ヨコハマって読むの？　日本っぽいけど、どう？」

パンフレットを女性に突き出して、リミナは指で指し示す。寄港地の欄に書かれていたYOKOHAMAの文字を見て、女性は感極まった表情で首を縦に振った。

「はい、横浜と読みます。日本の港です……ごちそうさまでした」  
女性は流暢な英語の中に、淀みのない発音の日本語を織り交ぜて答え、最後のホットドッグを飲み下して両手を合わせる。

「ヨコハマカー、綺麗な響きの町の名前ねー……どうやら、去年の暮れから運行開始したばかりみたい。おいくらするのかなー……げっ」

今度は運賃欄を見ていたりミアの表情が歪む。

「片道二八〇ドルう!? 三等客室の一番安いのでこれって、庶民には高嶺の花の額ね」

「二八〇ドル……」

それを聞いて、女性の表情も凍り付く。持ち合わせがなさそうな女性はおろか、小さな雑貨屋のリミナにも、預金通帳の残高がふと頭をよぎるような額なのだ。ちなみにリミナの店のホットドッグは十五セントなので、船賃がいかにか軽な金額ではないか推して知るべし、である。

「貴女あなた、日本へ行くのは茨の道よー……」

「……」

急に気まずそうな空気が流れる。

「今日はもう日が暮れるわ。部屋空いてるし、一晩なら泊めてあげる。そういえば、名前は何というのー？　ちなみに私はリミナ  
|| シャンハートよ」

リミナは皿とコーヒーカップを片付けながら、女性に名前を尋ねる。

「私は……モトコ。モトコ<sup>佐久原</sup>|| サクハラ<sup>子</sup>」

リミナは朝が弱い。

といっても、朝七時にはお店を開けなくてはいけないので、そもそも起床時間が早いのだが、リミナが起きて住居スペースのある二階から一階の店舗へと降りてきた時には、モトコは既に一階

で掃除をしていた。

「あ、おはようございますリミナさん」

「おはよーモトコ。疲れてたと思うのに、起きるの早いねー。ゆっくりさんでよかったのに」

リミナはうーんと背伸びをしながら、開店の準備をしようとす  
るのだが。

12

「ありゃ、ホントに店の掃除してくれたんだねー」

昨夜、せめて泊めてもらい食事もいただいたお礼にと、モトコ  
はお店の掃除を願い出ていたのだが、そもそも掃除と調理が苦手  
なりミナのこと、朝食の用意も込みでお願いしてしまっていたの  
だ。

「お食事の下ごしらえもできていますので、いまご用意しますね」  
モトコはそう言いながら、窓を拭く手をやめて調理場へと駆け

てゆく。

「へえ……」

その拭いていた窓から見える、ぼんやりと明るくなりつつある景色は、そこに硝子がらすなどないかのようにクリアで色彩鮮やかで、リミナがそれまで見ていた窓越しの景色とはまるで別物だった。

「すごいー、すごくピカピカよ、この窓」

リミナがうっとりしたように言いながら振り向くと、視界に入る店内にも微妙な違和感を覚える。

床はきれいに掃き掃除されて塵ひとつなく、棚の商品も線で引いたように整然と並べられ、カウンターやストールは汚れがきれいに落とされて……一言でいえば、店全体がピカピカになっていた。

「す、すごいわモトコ。これ全部掃除したの？」

「はい、でもキッチンまわりはまだ手つかずで……あ、お塩と重曹<sup>そう</sup>を少し使わせていただきました」

モトコは、窓際にある二人用の小さなテーブルに朝食が載った皿を並べながら答える。

14 白く綺麗な皿には、ペッパーを効かせたハムエッグと、昨日の残りの野菜を使ったサラダが盛り付けられ、少し厚めに切った食パンはトーストに。薄く塗られたマヨネーズが、軽く焦げて胃を刺激する香りを立てている。

「おお、おいしそうー。モトコ、実は調理上手だったりする？」  
テーブルの料理を見ながら椅子につくりミナは、オニキス色のコーヒーを運んできたモトコに訊ねる。

「得意というほどではないですが、嫁入り修行にひと通りのことは……」

「大したものだわ。とっくに嫁入りしたはずの私より上手よー」  
リミナはコーヒーにミルクを注ぎながら、カウンター奥の壁に掛けられた写真に視線を移す。

そこには、今とさして変わらぬ容姿で微笑むリミナと、彼女に寄り添うひと回り背の高い男性の姿があった。

「あの写真は……」

「ええ、亭主よ……五年前にドイツへ戦争に行ったきり。手紙はたまに来るから生き延びたのは違いないみたいなんだけどねー、いつ帰ってくるのだから」

リミナはあっけらかんに言うのと、コーヒーを口に運ぶ。

「んんっ!?! 私が淹れたのと味が違うわ。ホントに同じ豆かしら?」

「え? そのはずですけど……お台所で豆は一種類しか見かけま

せんでしたし」

モトコの淹れた浅煎り豆コーヒーは、リミナが昨日モトコへ振る舞ったそれに比べて香りが立ち、苦みが少なく酸味も豊かだった。

「むむう。モトコ、ここはひとつ貴女を女と見込んでの相談なんだけど」

リミナはトーストをもぐもぐさせてから、モトコの目をガン見する。

「どうせ持ち合わせないなら、船賃が溜まるまでここで働いていかない？ ちょうどゲストルームひとつ空いてるし。私の代わりに料理と掃除をやってちょうだい……じゃなくて、教えてちょうだい。亭主が帰ってきたらびっくりさせてやりたいわ」

軽くトーストのパン粉がついた手で、モトコの両手をわしっと

握りながら、リミナはモトコにぐっと詰め寄る。

「あの……それはとてもありがたいのですが、本当によろしいんですし……私、日系人ですし」

モトコは目を伏せる。アメリカの各地で、日系人への差別はいまだ激しい。店によっては物も売ってくれないこともザラで、モトコのことを不快に思うお客の方が大多数だろう、ということ骨身に染みて分かっていた。

「あはは、なんだそんなことね」

リミナは急に席を立つと、調理場の方へと姿を消し、そしてすぐに戻ってくる。その両手には、一本ずつ包丁が握られていた。

「え？ あの……」

モトコの顔が急に青ざめる。

「この包丁、いまは私の愛用品。すごいと思うのよね」

そう言いながらリミナは席へと戻り、手にした包丁をテーブルに静かに置く。ひと振りはキッチンで使われているもので違いなので裸だが、もうひと振りは手製らしき革の鞘さやに収められているた。

包丁を持ったりリミナは、少し雰囲気が違うとモトコは思った。敢えて表現するなら、眠った遠い記憶が炙あぶり出るような、とても懐かしいと感じる雰囲気だった。

「これって……お台所にあった包丁ですよね？」

「そう。モトコの国のモデルよ。五年ぐらい前かな。古道具屋で錆さびが浮き始めてたこれを見て、何かピンと来てね、その場で買ったのよ」

リミナは、革の鞘さやを抜き払って包丁を見つめる。

日系人は収容所に入れられる際に、財産の多くも手放すことに

なったり、あるいは預けていた家財を無断で売り払われてしまうことも多かったが、そんな日系人の板前いたまえが所有していたものが流れていたのだろう。

その柳刃包丁やなぎばはしかし、刃は錆どころか吸い込まれるような白銀の輝きを放ち、真鍮しんちゆうの口金くちがねは黄金に近い煌めきを、柄は美しい木地の艶つやを取り戻していた。

「研ぎ直したら、すごくよく切れるようになったのよ、これ。それに、うっとりするぐらいキレイ。ホントに素晴らしい感動だったわ……」

昨日は今にも死にそうだった貴女が、今日は見違えるように生き生きしてるのを見てさ、何かそのときのこと、ちょっと思い出してさ」

リミナは包丁を再び手にして眺め、そしてモトコの顔をじっと

見つめる。

「バカなお客どもに、モトコへの文句なんて言わせないわよ」

モトコが来てから半月ほど経ち、リミナの雑貨屋はお客が増えたかというと、特にそういうわけでもなかった。

元々、車の給油ついでに流れの旅行者やドライバーが、足りないものや必要なものを買ったり、休憩ついでに軽食を取るための店である。町中の人々は、もう少し大きめの店構えをしているバーやマーケットに行くことが多い。

モトコの前でああは言ったものの、リミナもお客に目を付けられると面倒になりそうなことは薄々承知しているのか、カウンターの接客とガスステーションのサービスのすべてで自分で行い、モトコにはもっぱら開店前と閉店後の掃除整頓と、お客からは死角

になりやすい奥のキッチンで調理をしてもらっている。

シャワーと石鹸せっけんで清潔に磨かれたモトコの身体は、その辺にいる白人女性よりも色白なぐらいの雪肌と、立派なボデイラインの持ち主だったが、髪と瞳の色ですぐに日系人とバレてしまう。逆に言うと、髪を帽子で隠して顔さえ見られなければ、遠目や薄暗い時間なら白人と見分けはつかないだろう、というのがリミナの判断だった。

「よう、入るぞ」

「いらっしやいー保安官さん」

流れの一見さんのお客がほとんどの雑貨屋で、数少ない常連客といえはこの歳をとった保安官ぐらいなものだろうか。

「最近、えらい店がこざっぱりになった気がするんだが……いよいよ亭主が帰ってくるかね」

「さあ、ここ半年は何の連絡もないですけどね。保安官さんの気のせいじゃないですかー」

リミナはいけしゃあしゃあと言い放つ。

「ふむ、そうかの。まあいいわい。コーヒー一杯頼むかな」

老いた保安官は、よっころせという言葉が体から聞こえてきそうな仕草しぐさで、スツールに腰掛ける。

「どうぞー」

保安官好みに、ミルクと砂糖を多めに入れたコーヒーをカウンターへ運ぶリミナ。

「……コーヒーも最近うま旨くなつたような気もするが……」

「いっぱい砂糖とミルク入れてるのに、分かるんですかーそんなこと?」

リミナは半ば呆れたような口調で言う。ちなみにリミナとモト

コは、適量のミルクだけで砂糖は入れない。

「気のせいか。やれやれ、歳はとりたくないね……とそうだ、先日夕子の悪い二人組のベイルジャンパーが出たらしい。せいぜい気をつけてくれよ」

「夕子が悪いって、どの程度？」

リミナは保安官に訊ねる。ベイルジャンパーは、借りた保釈金を踏み倒そうとして行方をくらませている犯罪者のことで、逃走先でも強盗などを起こすことが多く、町の人々には厄介極まりない存在だった。

お店の壁には、リミナの亭主が取得したバウンテイハンターの許可証が、飾り同然で額縁に入ってうっすら埃を被っている。モトコも背が届かないためか、十分に埃払いができていないようだったが、リミナは出掛けてまで捕り物はしないためか気にも留め

なかった。

「ふたりとも大戦に行ってた軍人くずれらしいな……街で強盗して二人ほど殺やったらしい」

保安官は、コーヒをゆっくりと啜すりながら他人事のように話す。

24 「そりゃ物騒なことね。それらしい人を見かけたら、保安官さんにお知らせするわー」

「冗談。そんな物騒なの、わしの手には負えんよ。何ならあんたの方で縛り上げてもらってもいいんだぜ。ごちそうさん」

保安官は悪戯いたずらっぽく言うと、代金をカウンターに置いてスツールから立ち上がり、店を出て行った。

「冗談。そんな物騒なの、女の私に生け捕りにしろとか無理でしょー」

溜息をつきながら、リミナは保安官が出て行った出口の方を見やる。

「ま、生け捕りじゃなくていいのなら、考えなくもないけどね……ふん」

リミナは誰にともなく不敵に微笑んでみせた。

「というわけだからー、モトコ、今夜から戸締まりはしばらくしっかりして寝ましよう。貴女あなの部屋にも後でロープつけとくから、強盗が入ってきたら窓からロープで降りて庭から逃げてね……それとはい、今日のお給金」

夜になり店を閉めて片付けをした後、リミナは五ドルを裸現金でモトコに渡す。法定最低賃金ギリギリもいいところだったが、その日の売り上げからの歩合制ぶあいで支払う小さな雑貨屋となると、

リミナには精一杯の額だった。

最近、朝七時から夜十一時まで店を開けている雑貨屋チェーンもテキサスの方で出来たらしいが、さすがに個人営業でそこまで店を開ける気はさらさらなく、リミナの店は夜七時には早々に閉める。そもそも夜遅くまで店を開けていると、いくら田舎町とはいえ女一人では物騒でもあった。

「ありがとうございます、ようやく少し船賃も貯まってきました」  
モトコは深々と頭を下げる。船賃二八〇ドルだけでなく、サンフランシスコまでのバス代や食事代、日本に渡った直後の行動費なども含めると、四〇〇ドル程度はあったほうがいいということだったが、このペースだと半年程度はかかりそうな具合だ。

「モトコのおかげか、コーヒーがよく注文出るようになったのが大きいわねー。ほら、水物ってコストは安いから利幅大きいのよ

」

夕食のドライフルーツ入りスコーンを口に運びながら、リミナは上機嫌で話す。スコーンは昨日までモトコのお手製だったが、作り方を教わって今日は初めてリミナが焼いたものだった。上々の出来に自然と頬も緩む。

「モトコ、日本に渡ってもアテとかあるの？　ずっとこの国で過ごしてたんでしょー？」

「ええ……この方と巡り会いたいと思っています」

モトコはポケットから、一枚の古びた白黒写真を取り出した。

歳の頃二十歳ぐらいたら、なかなかキリッとした雰囲気の良い青年だ。

「従兄弟くんか何か？　結構若いねー」

リミナは、近所の家から余り在庫の葡萄ジャムと交換で手に入

れた鶏肉の塊を、柳刃包丁とフォークで器用に切り分けながら、テーブル上の写真を評する。

「これは、もう戦争が始まるずっと前の写真です。ずっと手紙のやりとりをしていたのですが、戦争でやりとりができなくなっただけから、生きていますのかどうか……」

モトコは消え入りそうな声になり、両手で顔を押しさえて泣き始めてしまった。

「別のコミュニティに住む殿方とのがたと縁談の話もありましたが、どうしても気が進まなくて、そのうちに戦争になって縁談はうやむやになったんですけど……」

「もういいよ。辛かったんだね」

泣き崩れるモトコを、リミナは寄り添って優しく背中から抱きしめてあげた。

「そうだ、こっちにおいでよ」

リミナはそう言うと、テーブルから離れたってキッチン奥の勝手口からお店の裏側、ちよっとした広さがある庭へと出る。

「見てごらんよ」

春の訪れを告げるような、涼やかな乾いた夜風を全身に浴びながら、リミナは庭の真ん中に立つ木のそばに腰を落とす。

外からは死角となる位置ながら、遮る建物が何もない星空が見られるこの庭は、リミナの気に入りの場所だった。満天の星空、というありふれた表現がいかにも的を射たものかをまざまざと感じるような、見事な星空だった。

「まるで砂漠の砂粒みたいに星だらけの空なのに、あそこ、ほら。北極星はちゃんと分かる」

ほのかに明るい星を指さすリミナ。

「その想い人は生きていて、いま懸命にモトコのことを探しているのかもしれないよ。」

それは星の粒からひとつの星を探し出すような奇跡だろうけど、それでも星はちゃんと探せるんだから」

モトコは泣くのをやめ、涙の跡を張り付かせた顔で無心に星空を見つめていた。

「そう……そうですよ。だって私に最後に残されたのは、ソータさんとの思い出、ソータさんへの想い。ソータさんと添い遂げる奇跡だけなのですから……」

「愛も刃も心を込めて研げば、煌めきは戻るものよ。そう、折れさえしなければね」

リミナは、自身にも強く言い聞かせるように呟いた。

## 星粒の奇跡

「あらー、給油のお客さんかしらね」

外の景色が徐々に紅色べにいろへと染まりつつある時分じぶん。バイクとおぼしき停止するエンジン音を聞いて、リミナは雑誌の誌面から窓の外へと目を向けた。大戦前に作られたものと思しき、ずいぶんと古い型のバイクから男性が降り立つと、ヘルメットを外して中折れ帽子を丁寧に被り直している。

「日系人……？」

その一瞬見えた、白人にもスパニッシュにもないような独特の黒髪を、リミナは見逃さなかった。

「いらっしゃいー」

お店の中に入ってしてきた男性に、リミナはいつもと変わらぬ声を

かける。男性は板チョコレート一枚と瓶コーラ一本を、レジカウンターへと無言で置く。男性の微妙な緊張感と、全体的に隙のない動きを見破ったりリミナは、ちよつとした違和感を覚えた。

「はい、十三セン……!?!」

リミナは言葉を遮ると、窓の外から自分へと向けられた……銃口に気づき青ざめる。

「殺気……!」

同時にカウンターの男は、コーラの瓶を引っ掴むと……振り向き様に窓の外へと投げつけた!

バァンツ!

窓硝子がらすとコーラの瓶と炸薬さくやくと。三つが同時に破裂する音が、店の中に盛大に響いた。

「強盗よっ! モトコ逃げてツ!」

リミナはとっさに叫ぶと、カウンターの陰に身をかがめながら、レジ下に忍ばせてあった革鞘入りの柳刃包丁やなぎばを左手で掴み取る。

「えっ……!？」

その言葉にやはり身をかがめながら、商品棚の陰に身を隠している男は一瞬動揺したような声を上げる。とっさにコーラ瓶を投げて拳銃の弾丸を防いだかと思うと、その一挙動で流れるように商品棚の陰へと身体を滑り込ませる動きは、やはりただ者ではない。

「おい、ミセスいま何て……?」

「ちっいいいっ、最後の弾だったんだぞ大事に使いやがれこのドジ」  
「うるせえ、コーラの瓶がすっ飛んでくるなんて思わねえし、しよーがねえだろボケ」

男の声を遮るように、店の外からは大きなだみ声が聞こえてく

る。とりあえず強盗の拳銃の弾はもうないらしい。

「ちよっとあんた達！　お店めちやくちゃにしてどうしてくれんのよ！」

リミナは怒り心頭といった声を張り上げながら、カウンターに右手をつき華麗に飛び越え、ロングスカートをふわりとさせながら綺麗に着地する。その無駄のない動きとただならぬ気配に、男はとりあえず白かったショーツとか見事な美脚とか、諸々は見なかったことにしたほうが身のためだと思った。

「……とりあえず後回しのようだな」

怯む様子なく店の外へすたすた向かっていくリミナに、男も商品棚から立ち上がり店の外へと歩を進める。

「ほらー、刺されたくなかったらおとなしく保安官事務所に行きましようかー？」

リミナは柳刃包丁やなぎばを抜き放つと、ピツと切っ先を強盗二人へと鋭く向ける。

「助太刀すけだちさせてもらうぞミセス」

男は自分のバイクにある荷物から、一メートルほどの長さの丸木の杖を抜き放つと、リミナの側へと歩み寄ろうとする。

「ええい、おとなしく捕まるなんざごめんだぜ」

強盗の一人、色あせたシャツとジーンズに身を包んだ黒人の大男は、弾切れの拳銃を放り捨て、ボクサーの構えとフットワークを取りながらリミナとの距離を詰める。

「女一人と東洋人野郎に、銃なんざいらねえぜ」

もう一人、よれたフェルト帽を被り、着古されたシャツとズボンに身を包む白人の強盗は、乗ってきたおんぼろのピツクアップカーの荷台から、柄の長いシャベルを手を取った。

ロングシヤベルを左前中段に隙なく構える白人強盗は、たまたまお客として立ち寄った日系人の男と対峙する。

「東洋人野郎め、ケガしたくなかったらおとなしく帰りやがれ」  
 「物盗り風情が偉そうに。叩きのめして警察に突き出してやる：  
 ……北辰一刀流、桑山颯太。いざ尋常に勝負……は強盗に望むべく  
 もないか。参るぞ」

颯太と名乗った日系人の男は、手にした枇杷の丸木杖を木刀の  
 ように星眼に構え、鵲鴿の尾の動きのように剣先を動かしながら、  
 体格がひと回り大きな白人強盗に立ち向かわんとする。

「てめえ！」

白人強盗は躊躇なく踏み込むと、シヤベルの刃を縦にして真っ  
 直ぐに突きを繰り出した。

しかし、颯太は落ち着いて丸木杖をすつと前に繰り出し、シャベルの刃の裏側を削るようにしてシャベルの軌道を逸らせ、そのままカウンターで白人強盗の小手をしたたかに打とうとする。

「お見通しだぜ東洋人野郎」

「……なに!？」

しかし白人強盗は、シャベルの刃をくるりと九〇度返すと、刃と柄の間のT字の角に丸木杖を引っかけ、そのままぐるりと内側へ捻り下げようとシャベルを操った。

「いかん」

颯太はとっさに体を裁いて丸木杖を後ろに引き、得物を捻り飛ばされることだけは免れる。しかし体勢がわずかに崩れた颯太に、白人強盗は流れるような動きで右前に足を踏み出し、柄の部分を押し込むようにして、颯太の胸板をしたたかに打ちつけた!

「ぐあっ！」

そのまま後ろへ吹っ飛ばされるように尻餅をつく颯太<sup>そうた</sup>。しかし、後転してすっと立ち上がると、素早く丸木杖を構え直していった人間合いを取る。

シヤベルが当たる直前に反射的に後ろへと転んで、衝撃を和<sup>やわ</sup>らげ難を逃れたが、今や熟練の域に達したはずの一刀流奥義の切り落としを、異国の地で易々といなされてしまったことに驚く颯太<sup>そうた</sup>。一瞬のうちの攻防ではあったが、この白人強盗はかなりできる。

「シヤベル格闘術<sup>かくとうじゆつ</sup>か……」

ただ闇雲<sup>やみくも</sup>にシヤベルを繰り返しているわけではない。シヤベルの長さ<sup>ながさ</sup>と形<sup>かたち</sup>を巧みに利用し、無駄のない体裁<sup>たいがい</sup>きをベースにした、突き技と返し技を主体に構成されるマーシャルアーツ。欧州戦線の戦場の中で自然と体得したのであろうシヤベル格闘術を、颯太<sup>そうた</sup>

は初めて目の当たりにした。

「もう終わるかよ東洋人野郎」

白人強盗は、シヤベルを再び左前中段に構えながらじわりと迫る。正式な型のある武術が相手ではないので、日本の剣術にはない足の甲など変則部位への攻撃も警戒しなければいけない。颯太も迂闊には打ち込めないでいた。

——焦るな。心を静めろ。

互いに返し技、後の先を得手とする場合、ある程度の力量差がない限りは先の先を取らされた方が負ける。颯太は心を静めて集中し、いかなる攻撃にもその一瞬の隙を逃すまいと、相手が打ち込んでくるのを静かに待つ。

「くたばれ東洋人野郎ッ！」

そして、白人強盗の方がしびれを切らし、再びシヤベルを今度

は股下から真っ直ぐ切り上げながら突くように繰り出してくる。  
やはり変則的な軌道だ。

颯太は左横斜めに踏み込みながら流れるように体を裁き、掠めるようにしてシヤベルの突きをかわしていく。

白人強盗はシヤベルの刃をやはり九〇度返して横向きにし、そのまま横へ薙ぎ斬るような無駄のない連撃に移ろうとするが……しかし颯太が踏み込んで打ち下ろす電光石火の剣は、白人強盗の連撃を許すほど甘くはなかった。

がすんっ！

「ぐがあっ……！」

北辰一刀流の奥義・星王剣を彷彿とさせるような流麗にして素早い見事な剣捌きで、丸木杖は白人強盗の頭を見事に打ち抜いたのだった。

一方、黒人強盗と対峙するリミナは柳刃包丁やなぎばを引きながら、後ろに軽くステップで下がる。彼女が一瞬前までいた空間を、鋭い左ジャブと必殺の右ストレートの見事なコンビネーションが空を切った。

——思ったより拳速けんそくが速いわね。こいつ、できるわ。

——なんて女だ、避けやがった。一体何者だおい!?

リミナと黒人強盗、お互いの驚きの視線が交錯する。

黒人強盗も、戦中に陸軍内部のボクシングの試合では、相手はエキシビジョンとはいえ今のウェルター級チャンプと互角に打ち合った腕前だったが、まさか間合いを見切られるとは予想外だった。

「どうやら、おとなしく保安官事務所へ行く気はなさそうね」

リミナは、柳刃包丁やなぎばを握り直して、体勢低く身構える。

「あんたも素人じゃねえな。そのナイフの構えは陸軍格闘術のも  
のだろうが」

黒人強盗は、軽快なフットワークを崩さずに低く問う。リミナ  
は、陸軍の護身術を指導していた夫の練習相手をしながら、自分  
も手ほどきを教わったのだが、そんなことは強盗なんぞに教えて  
やる義理もない。相手の左ジャブの連打をかわしながら、黒人強  
盗の隙を窺うかがう。

「このっ、ちよろちよるとすばしっこい牝猫めすねこだぜっ」

まがりなりにもリミナは刃物を持っている。モーションが大きい  
ストレッチやフックでは、かわされて刺される危険が大きいと  
判断した黒人強盗は、かつて対戦したウェルター級チャンプ直伝  
の、左のジャブとステップワークを巧みに駆使した、スピード重

視のアウトボクシングでリミナに迫る。

「くっ……」

リミナは何とか避け続けるが、黒人強盗の方がリーチは長いため、容易に反撃には移れず、じわじわとお店の壁際に追い込まれつつある。黒人強盗が巧みに回り込みながら、ジャブを細かく繰り出してリミナを追い詰めているのだ。いくらジャブとはいえ、グローブを着けていない大男の拳こぶしがリミナに直撃すれば、ただでは済まないだろう。

「もらった！」

ついにリミナをお店の壁際に追い詰めた黒人強盗が気合い一閃、やや大振りな左フックを繰り出す。そのまま右ストレートとのコンビネーションで、一気にリミナを仕留める意図だ。

——来たわね！

しかしリミナは拳を見切りつつ、落ち着いて身をすっと屈めて左フックをかわす。

バリインツ！

細身の女性など直撃すればひとたまりもない剛拳は、しかしリミナではなくお店の窓硝子を木っ端微塵に砕く。

「ぐああッ!？」

飛び散る窓硝子の破片と、拳に突き刺さったガラス片に黒人強盗が驚いた、一瞬の隙を見逃さず。

「硝子代は弁償してもらおうよ」

屈んだ姿勢から繰り出して喉元に突きつけたリミナの柳刃包丁は、黒人強盗をフックの姿勢のまま凍りつかせるには十分だった。

「勝負ありね。おとなしくしないと本当に刺すわよ」

「うっ……くっ」

リミナの勝ち誇った言葉に、しかし黒人強盗が怯みながらも、ステップで真っ直ぐ後ろに下がろうとした刹那。

がすんっ

「危ないところだったな、ミセス」

ただたどしい英語は黒人強盗の後ろから。白人強盗を倒した颯太が駆けつけ、後ろは無警戒だった黒人強盗の後頭部を、丸木杖で打って昏倒させたのだった。

「ご苦労さん、お手柄だったね」

保安官は、取り押さえられていったん診療所へと運ばれてゆく、強盗二人に視線を送りながらリミナに声をかけた。二人とも脳震盪を起こしているが、じきに意識も戻るだろうと思われた。颯太がうまく加減したのである。

「なあにがご苦労さんよ。窓硝子がらす二枚も割れちゃって、こっちはとんだ災難よ」

リミナはぶんむくれながら、両手を腰に当てて保安官を睨にらんでいる。

「そう言いなさんな。相手は先日言ってたベイルジャンパーだから、報奨金ほうしょうきんぐらいは出るだろうよ……窓硝子がらす二枚分ぐらいにはなるんじゃないか？」

保安官は悪戯いたずらっぽく笑いながら、ゆっくりと煙草たばこを一本抜いて火をつけ、何とも穏やかな表情で旨うまそうに一服する。

「いやあ日が落ちるとまだ冷え込むなおい。ひと仕事終えたら、今日はバーで一杯引っかけてから帰るかね」

保安官は煙草たばこを口にくわえ、鈍重な仕草しぐさで帽子を被り直すと、そそくさとその場を立ち去っていった。

「あなたもね、通りすがりの日系人さん。最初はグルかとも思っ  
ちゃったけど」

笑顔で振り向くりミナに、颯太は強盗達と対峙している時とは  
似ても似つかぬ、おそろおそろといった様子でリミナに聞く。

「礼には及ばないが、ミセス、尋ねたいことがある。もしや、も  
しやこの人をご存じでは……」

颯太が右手で、胸ポケットから手紙と写真らしき物を取り出し  
てリミナに見せようとする。

「う……うそ……まさか……」

声は、颯太の背中の方から聞こえた。

颯太は振り向いてその姿を認める。ほんの一瞬の間を置いて、  
ついに十数年ぶりの再会を果たした二人は、声もなくお互いの元  
へと駆けてゆく。

「なるほど、ね。まさか星の粒からひとつの星を探し出すような奇跡、本当に起きるなんて」

颯太そうたが地面に取り落とした手紙と写真を拾い上げ、その内容を見たりミナ。今よりも少し若いモトコのカラー写真越しに、星粒に彩られた空の下で抱き合う二人を見て、リミナはそっと写真をはさんで手紙を折りたたんだ。



別れ、そして……

「お世話になりました、リミナさん」

モトコは颯太<sup>そうた</sup>とともに深々と頭を下げた。

翌日の昼下がりに、颯太<sup>そうた</sup>とともに船で日本へ行くことになったモトコを、店の入り口先でリミナは見送っていた。

49  
旅費や船賃は、颯太<sup>そうた</sup>がある程度は持っていたので問題はなかった。話によると、持っていた小型自動車の運転免許が役立ち、短期間で米国へ渡る旅費を稼ぐことができたらしい。

リミナには少々の名残惜しさはあったが、かといって彼女を引き留める理由もない。

「貴女<sup>あなた</sup>と過ごした毎日は楽しかったわよ、モトコ……これランチよ。お二人で仲良く食べてね」

リミナは、サンドイッチが入った小さなバスケットをモトコに渡すと、同時に小さく薄い木箱のようなものも手渡した。

「これは？」

「あなた貴女と私の友情の証よ」

中を開けると、ひとふりの柳刃包丁やなぎばが綺麗に納められていた。キッチンで使われていたものだ。

「よろしいのですか？ 大切なものだと……」

「いいのよ。一本はぜひモトコに持っていて欲しいのよ」

リミナは感慨深そうに言うと、二人の元を離れる。後部座席にモトコを乗せたバイクは、力強いエンジン音を轟かせ、幸ある未来へ続くであろう道を駆け出していった。

リミナは今日もカウンター越しに腰掛けて、ぼーっと外を眺め

ている。

磨き上げられた硝子<sup>がらす</sup>越しには、夕焼けに紅く焼かれた西部特有の荒れた大地が映っている。いつもと変わらぬ、しかしリミナにとっては安堵感のある光景。

カラン……

「いらっしやいー……!？」

51

雑貨屋の小さな扉が開かれ、ひとりの男性の姿を認めた瞬間、リミナはカウンターを飛び越えて、男性のもとへ駆け出していた

――

（星粒の奇跡を信じて 完）

敢えて言うならあとがきっぽい

初めての方ははじめまして、そうでない方はご無沙汰しております。今回は、前年に発表いたしました戦後七〇年作品『蒼と雲の彼方で』のスピノフ作品こと『星粒の奇跡を信じて』を、二〇一六年上半期の新作としてお送りします。

時系列的にも内容的にも、ほぼ続編にして完結編といっても差し障りがないのですが、『蒼と雲の彼方で』の主人公だった颯太の目線ではなく、『星粒の奇跡を信じて』は新キャラクターのリミナ目線で書かれている作品ですので、正式には続編ではなく、あくまでスピノフ作品、ということになります。

『蒼と雲の彼方で』を発表後、この話の続きが気になる等の感想を多く頂戴いたしました。感想をいただいた皆様には、この場

にて謹んでお礼申し上げます。それに十分応える形と果たしてな  
ったかは疑問ですが、本作を読んでいただき大変嬉しく思います。

『星粒の奇跡を信じて』は、純粹にエンターテイメント性を前  
面に押し出したストーリーを採用しており、『蒼と雲の彼方で』の  
ような、エンターテイメント性を盛り込みつつも強く太平を志す  
という社会メッセージ性は、少なめとなっているのが大きな違い  
といえます。

最後になりましたが、今回表紙イラストを担当していただいた  
REI氏には、ご無理を申し上げますところを応えていただき、こ  
の場にて深くお礼申し上げます。

二〇一六年五月五日 悠川 白水

ほしつぶ きせき  
星粒の奇跡を信じて

(電子書籍版)

はるかわ はくすい  
悠川 白水

平成 28 年 5 月 5 日 紙本版発行

平成 28 年 10 月 25 日 電子版発行

平成 29 年 1 月 10 日 電子版改訂

著者・発行人 悠川 白水

表紙イラスト R E I

発行サークル・電子化 白水の小説棚

著者 Twitter : @haruhaku

絵師 PixivID : 17108544

※ この作品はフィクションです。実在の人物や団体・兵器と実際の出来事などとは一切関係がありません。

©2016-2017 Hokusui Harukawa (illust REI) All Right Reserved